[島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要　Vol. 50　9～18（2012）]

多読教育の発展的試み

竹　森　徹　士　　小　玉　容　子　　ラング　クリス
(総合文化学科)

Project to Improve English Education through Extensive Reading Methods and Materials

Tetsushi Takemori, Yoko Kodama, Kriss Lange

キーワード：多読 Extensive Reading　英語教育 English Education

１．はじめに

筆者らが2009年度より本学で試みている多読教育は、今年度で３年目を迎えることになる。これまでの主な取り組みに、図書の整備、課外活動である「多読クラブ」、部分的な多読教育の授業への導入があり、[1] それらの活動は今年度も継続しているところである。図書の選定、購入は随時行なっており、多読用教材はかなり充実してきた。昨年度は、本学図書館に多読図書用のコーナーが設けられ、シリーズ別、レベル別に図書が配置され、併せて多読関連の参考書なども揃えられている。「多読クラブ」の活動も定期的に行なった。

また、今年度も、授業への導入として、授業のなかで多読教育を試みた。ラングは、昨年度に引き続き、今年度前期の「ライティングⅠ」において多読教育を行なった。小玉は、昨年度後期の「アメリカ文学入門」において、副読本的な扱いでGraded Readersを用い、竹森も昨年度後期の「英米文学を読むＢ」において副読本としてGraded Readersを用いた。今年度は、文学作品のリトールド版であるGraded Readersをテキストに用いた授業も行なわれた。小玉は、今年度前期の「英米文学を読むＣ」において、アメリカ文学のリトールド版を用いて授業を行なった。

今年度はさらに、多読教材の発展的活用として、地域連携活動である一般向けの公開講座において、小玉が「英語で読書：絵本の読み聞かせに挑戦」という、多読用教材を用いた夏期集中の教育講座を試みている。

本稿では、2011年度における多読教育とその発展的試みとして、多読用教材を用いた英語教育活動について、それぞれの実施状況と成果について考察し、今後の課題について整理を行ないたい。

２．図書の整備

Graded Readers、Leveled Readersを中心に購入し、各出版社から出されている主な多読用教材のシリーズを継続して揃えている。主なシリーズとして、Oxford Reading Tree (ORT)、Oxford Bookworms (OBW)、Penguin Readers (PGR)、Macmillan Readers (MMR)、Cambridge English Readers (CER)、Foundations Reading Library (FRL)、Footprint Reading Library (FPR)、I Can Read Books (ICR)、Oxford Wolf Hill、Curious George、Nate the Greatなど人気主人公を据えたシリーズものがある。また、映画をもとにした物語

が多いScholastic ELT Readers（SCE）も揃えた。これらに加えて、「読みやすさレベル」(以下YL)が低い図書を重点的に増やしている。朗読CDが附属するものは、今後の多聴教育を考慮して、CDが附属するものを備えるようにしている。また、これらの図書以外に、イラストが豊富で、コミックのようなレイアウトを用いたCaptain Underpantsシリーズや、*Slum Dunk*、*Nodame Cantabile*、*One Piece*、*Black Jack*など、日本の人気マンガの英訳本を一部揃え、少しでも英語で書かれた物語に親しみを感じられるような環境を整えた。日常的に、気軽に洋書が手に取れる環境にない本学の学生にとっては、こうした図書の整備は必要なことである。2011年度10月現在、本学図書館の多読コーナーには、ほぼ1400冊程度の図書が備えられている。

本学図書館の多読コーナー

３．多読クラブ（2011年度前期）

１）実施状況

筆者らが担当している授業で募集チラシを配り、自主的な参加者を募った結果、総合文化学科英語文化系１年生10名、日本語文化系１名、計11名の学生から参加申し込みがあった。初回の４月８日にガイダンスを行ない、出席者には、本学所蔵の多読本をもとに作成した「多読読書記録手帳 1st Stage」を配布した。以降、授業期間内に、本学図書館のグループ閲覧室において、週２回（火、金）の定期的な活動を行なった。

これまで、授業終了後の放課後に活動を行なっていたこともあったが、開始時間が遅いという学生からの声があったため、授業の空き時間に時間を設定することにした。そこで、当学期の時間割をもとに空き時間を探し、火曜日は午後１時から２時、金曜日は午前９時30分から10時30分に時間を設定し、毎回教員が常駐していた。

初回のガイダンスで、ORTを中心にレベルの低いものから順に読むように指導し、以降は各自の選択に任せて読書を行なっていた。実施回数はガイダンスを含めて29回であり、活動終了後に、これまで用いていたものと同内容のアンケートを行ない、11名の学生から回答を得た。活動期間を通しての出席率は36%であった。常に出席する学生がいる一方で、数回の参加でやめてしまう学生、来たり来なかったりする学生がいた。

２）アンケート結果

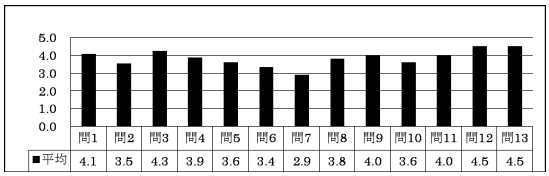
2011年度前期は、英語文化系１年生を対象に「ライティングⅠ」(ラング担当）の授業が開講されており、授業の一部に多読が採り入れられていた。今回の「多読クラブ」参加者11名のうち７名は「ライティングⅠ」の履修者であり、「ライティングⅠ」での読書状況結果を参照したい。

アンケートは、これまでの多読活動で用いたものと同内容の項目から成り、各項目が５段階評価で、５が「とてもそう思う」、４が「まあそう思う」、３が「どちらでもない」、２が「あまりそう思わない」、１が「全くそう思わない」である。また、自由回答欄も設けてある。アンケートの項目は以下のとおりであり、結果は図１のとおりであった。

問１　英語の本を読むのに抵抗がなくなった
問２　本以外でも（新聞、教科書、問題集など）英語で書かれた文章を読むのに抵抗がなくなった
問３　英語を読むスピードが速くなった気がする
問４　本を読むのが楽しくなった
問５　語彙が増えた気がする
問６　リーディングの実力がついた気がする

問７　文法力がついた気がする
問８　これからも続けていけそう
問９　他の人にも多読をすすめたい
問10　読書のペースはちょうどよい
問11　本の難易度はちょうどよい
問12　本の種類が豊富だと思う
問13　本の数は十分だと思う

図１　「多読クラブ」アンケート結果



	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
■平均	4.1	3.5	4.3	3.9	3.6	3.4	2.9	3.8	4.0	3.6	4.0	4.5	4.5

最も高い数字を示したのは問12、問13で4.5ポイントである。そして、問３の4.3ポイント、問１の4.1ポイントが続く。以下、問９、問11の４ポイント、問４の3.9ポイントがある。低かった数値として、問７の2.9ポイント、問６の3.4ポイントである。

自由回答では比較的多くのコメントが寄せられた。最も多かったのが、「読みやすくてたのしかった」、「思いのほかとりくみやすかった」、「絵本でよみやすかった」、「読みやすくて面白い本だったから気軽に読めました」といった、素材の読みやすさ、物語の面白さに触れているものだった。「いきなりレベルの高い本を読んでいやな思いをするより、そんなにレベルの高くない本を読んだほうがいい」というコメントもあり、やはり文章の英語レベルに触れたものである。これらに関連して、英語の本を読むことについて、「英語を読むのが苦痛でなくなりました」、「たくさん読めた気がする」、「英語にいっぱい触れることができた」というコメントもあった。「本を読むきっかけをつくることができたのでとても良かった」、「これからも少しずつでも読み続けていきたい」、「時間があればできるだけ本を読むようにしたい」という読書に前向きなコメントも見られた。

また、「同じシリーズなのでPart9とかになると少し飽きました」といった意見、「火曜日は昼からOFFだったのでなかなか行く気になれなかった」という活動時間に関する意見もあった。

３）考察

今回の「多読クラブ」は、これまでの活動と比べ、出席率が低かった。実施の面で筆者らがこれまで確認してきた「多読クラブ」の課題として、活動日の設定が難しいということがあり、これらの課題を解消すべく検討をしてきたが、十分な対応にまでは至らなかった。2009年度後期実施の「多読クラブ」では、参加者が多く履修している授業の直後に活動時間を設けており、非常に出席率が高かった。だが、時間割の都合から、好都合な設定が常にできるわけではない。こうした点が、授業時間外、あるいは授業の合間を縫って時間を設定する課外活動の難しさである。

アンケート結果について考察したい。問1のポイントの高さが示すように、英語読書への導入という点では、「多読クラブ」の活動は効果があった。自由回答で多かった「読みやすさ」についてのコメントは、絵本という素材や、単純で分かりやすい物語のことでもあるだろうが、問11のポイントの高さと併せて考えてみても、やはり英語で書かれた文章の読みやすさについてのコメントであろう。学生にとっては、まず英語で書いてある文章が読めるかどうかが気になるところであり、英語の文章を読むこと自体に対して身構えてしまう面はある。こうした心理的抵抗を取り除くことができることにこそ、やさしい本から始める多読の利点が発揮される。また、多量の英語に触れた、多量の英語を読んだという意識を学生が持てた点は良かった。

ただ同時に気になるのは、読みやすかったかどうかという印象から、さらに進んで、どの程度読書を楽しむ、あるいは読書として楽しむことができたかということだ。そうした点で気になるのが、問4のポイントの低さである。問4のポイントは、今回のアンケートの他項目との比較では高めだが、過去の「多読ゼミ」、「多読クラブ」の活動でのアンケートの同項目のポイント（それぞれ4.5ポイント、4.3ポイント）[2)] と比べると伸びが低い。多読教育では、

読書の楽しさが推進力となって継続的に学習を続けることが期待されており、読書を楽しめたかどうかは重要な点である。回答を個別に見てみると、５ポイント「とてもそう思う」が４人、４ポイント「まあそう思う」が２人、３ポイント「どちらでもない」が５人となっており、楽しいと思った学生と、楽しいとも楽しくないとも思わなかった学生との違いがはっきりしているように思われる。例えば、後述の「ライティングⅠ」の授業にも出席して、半期で10万語以上読んだ学生は、この項目に５ポイントをつけている。やはり、読書の楽しさを実感するにはある程度の読書量、継続が必要だろう。もちろん、楽しいから続ける、あるいは、続けていたら楽しくなった、というサイクルのきっかけは人それぞれだろうが、そうしたサイクルに乗りやすい学生、乗りづらい学生の一定の傾向は把握しておくべきである。

また、問６は英語力の伸びを実感できたかどうかに関わる項目だが、これも他の項目に比べて低い。これまでの調査からも、半期の自発的な読書活動での読書量が限られていることは明らかであり、[3] クローズ・テストなどで英語力の伸びを知ることはできるものの、例外的な場合を除いて、劇的な伸びを実感させることには自ずと限界がある。今後、授業内、授業外、いずれにおいてであれ、継続的な多読教育、多読活動を行なうため、多読のメリットを、どのように学生にアピールし、実践すべきか、改めて検討したい。

だが、過去の活動も含め、「多読クラブ」の活動を続けていくなかで、少しずつではあるが多読活動は浸透してきている。新学期になって、今学期の多読はいつからやるんですか、といった問い合わせをする学生が出るようになった。また、今回の「多読クラブ」には参加していないものの、これまでの「多読クラブ」の活動や、授業等で多読を知り、自分なりに多読を続けている学生、卒業生がいる。本学図書館の学生図書委員会の活動の一環である、ポップを使った推薦図書のコーナーにGraded Readersの推薦文を書いてくれる学生が出てきた。こうした広がりは、今後の活動の大きな後押しになると思われる。

４.「ライティングⅠ」

英語文化系１年生を対象とした必修の授業で、ラング担当のクラスでは英語文化系所属の学生のうち17名が出席していた。授業では90分の授業時間の半分の45分間を授業内読書時間として、毎回多読に充てた。第一言語、第二言語の習得において、多読がライティング能力の向上に効果があることを示す報告は多い。[4] こうした背景をふまえたうえで「ライティングⅠ」に多読を導入した。

１）手順

授業に際しては、初めて多読に取り組む学生のモチベーションを高めることに努めた。多読の意義を十分に学生に説明し、続けて、辞書を使わない、読む本は自分で選ぶ、わからなければ飛ばす、面白くなければ途中でやめても構わない、といった多読の方法を解説した。多読の意義については、Masonの報告および酒井のウェッブページを紹介した。[5] また、本学の多読経験者の声も紹介した。

それぞれの学生に多読記録簿を渡した。酒井のウェッブページの感想を、記録簿の最初のページに書いておくよう指示した。記録簿には、毎日30分、100wpmの読書をするという想定で、半期でおよそ20万語読むという目標を記しておいた。成績の20%は読書量に基づいて評価することを学生に伝えた。

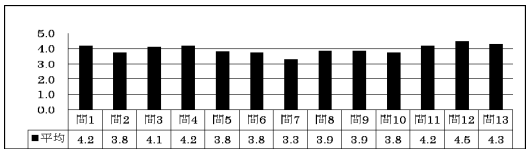
記録簿には二種類の文書を用意した。一方はリストで、記入する内容は、それぞれの本を読んだ日付、YL、読んだ時間、語数、CDを聞いたかどうか、そして三段階の評価を書くものである。もう一方は、日本語による物語の要約と感想、参考になった語句の引用を書くものである。後者は、学生が実際に読んで理解したかどうかを確認できるようにするためであり、また、学生との読書指導の個別面談の際の資料とするためであった。「多読クラブ」に参加している学生もいるため、「多読クラブ」で読んだ本も含めて記入させた。学期末には、多読の感想を把握するために、「多読クラブ」で用いたものと同様の項目から成るアンケートを実施した。

２）読書状況・アンケート結果

ほとんどの学生はORT7まで進み、学期後半ではより高いレベルの本を図書館から借りて読んでいた。もっとも人気が高かったのはORTだが、ICRやPGRを読む学生も若干いた。授業では記録簿を参考に個々の学生との面談も行い、読書指導をした。面談では、読書進度を確認し、学生の好みに合わせて本を薦めたりした。

平均読書語数は約6.0万語だった。10万語以上読んだ学生が２名いた。その一方で、読書量にかなり伸び悩みが見られる学生もいた。また、アンケート結果は、図２のとおりだった。

図２　「ライティングⅠ」アンケート結果



最も高い数字を示したのは、問12の4.5ポイントであり、続いて問１、問４、問11が4.2ポイントと続く。低かった数値としては、問７の3.3ポイントである。自由回答としては、「一日に少し読むだけでいいので、気楽に続けられた」、「簡単に読めるので楽しかった」、「読むスピートが速くなった気がする」と多読を楽しんで続けられ、英語力の向上を感じている学生もいる一方で、「だんだん難易度が上がってくると読むことが大変になった」、「自分の実力が上がったかどうかわからない」という不安を感じている意見もあった。

３）考察

昨年度の「ライティングⅠ」における多読では20分の授業内読書時間を設け、その結果、平均読書語数は約4.6万語だった。[6] 今年度の「ライティングⅠ」では授業内読書時間を45分に広げたため読書語数は増えた。ただし、約6.0万語の平均読書語数が示すように、比率で考えれば、時間を延長した分の読書語数の伸びはなかった。これは、学生が本を読むたびに要約を書かなければならなかったことが一因であろうが、読んだ本の要約という作業は、個人指導、成績評価のための資料として必要な措置であった。

アンケートでは、読んだ語数に関係なく、多読を楽しみ、続けたいと感じている学生がいることが分かった。学生に多読を続けてもらえるようにするためには、「自分の実力が上がっているという実感」とともに多読の原則である「楽しみ」を感じられるようにすることが必要だろう。

英語力を高めるためには読書を欠かすことはできず、多読により自律的な読者が育つ。だが、教師による継続的な支援と助言なしでは、学生は多読を続けることが難しい。今回の「ライティングⅠ」では、授業内読書時間を延長し、その間に個別指導を行ったため、個々の学生の状況をより把握した指導が可能になった。授業内読書の時間延長は、学生の読書語数増加だけでなく、個別指導の時間の確保の点でも意味があった。

５．Graded Readersの活用

英語文化系２年生を対象とした「英米文学を読むC」でMMRの*Moby Dick*（Upper:Level6）をテキストとして使用した。当該の授業では、これまで、短時間で読み切ることができる点、半期で複数の作家の作品に触れられる点などを考慮して、短編をテキストとして用いてきた。しかし、多読用図書の中に文学作品のリトールド版が数多くあり、今年度はそれらの中から主要なアメリカ文学作品を選んでテキストとした。原書では読み切ることが難しい作品でも、リトールド版なら作品を読みきることができ、かつ、代表的なアメリカ作家の長編作品に触れられる。リトールド版を読むことで、文学作品の講読という点で失う部分も多々あるが、日本語にしていく作業を最小限にし、スピード感を保ちながらストーリーを読むことで、英語での読書体験を学生が楽しんでくれることを期待した。多読は個人個人がそれぞれのレベルで黙読する読み方が基本だが、読書サークルのように内容を共有したり、音読を楽しんだりなど、多読図書活用の可能性を広げる試みでもあった。

受講生は15名で、90分16回の授業のうち12回をMoby Dickに充てた。授業では１ページ前後の単位で、誰が、何を、何故しているか、何が起こっているか等、内容理解を中心に、原書からの補足説明を加えながら読み進めた。このセクションでは、授業終了後のアンケートをもとに、学生が今回のテキストを、多読用図書の読書という面から、どのように読んだかについて述べていく。

１）読書語数・語彙について

SSS英語多読研究会の読書記録手帳によると*Moby Dick*は3.4万語のテキストだが、予習や、最終週に実施した内容理解チェックの筆記試験準備のための復習で繰り返し読んだであろうことも考慮に入れると、かなりの英語量に触れたと考えられる（読み方の違いはあるが、例えば、「ライティングⅠ」での平均読書量6.0万語と比較)。アンケートで「読む量は適切だったか」の問いに、「最初は多いと思ったが、読み終えてみたらちょうど良く感じた」、「少し多いかなと思ったが、しっかりした物語を読むにはこのくらい要るかなとも思った」など、読み慣れることで「適切な分量だ」と感じることができた学生がほぼ半数だった。一方、「少し多い」と思った学生や、「内容が難しいので少し多い」と思った学生が半数いたので、内容理解を補助するプリントなどを用意するなど、もう少し丁寧に進めるべきだったと考えている。語彙に関しては、「海や船に関する語彙が増えた」、「何回も出てくる語はよく覚えた」など、頻出語彙や特殊な語彙などが記憶に残ったようで、ほぼ全員が「語彙が増えたと思う」と回答した。予習や復習で繰り返し読んだことも語彙の定着を助けたと思う。

２）ストーリーの理解について

日本語に訳さずストーリーを読むという読み方に関しては、「英語でストーリーを読むことに慣れた」と10名の学生が回答していた。「読むにつれて、かなりスピードが上がった」「最初は読みづらかったが、だんだんスラスラ読めるようになった」など、英語を読んでそのまま理解する感覚が身についていったようだ。

「ストーリーは理解できたか」の問いには、９名が80%以上の理解、６名が50%程度の理解と回答した。内容を問う筆記試験の結果からみると、理解に関してはもう少し低いパーセンテージとなるが、理解できたという感覚は読み進めるうえで非常に重要であり、当然のことながら、この回答が「ストーリーを楽しんだか」の問いに対する回答とも比例していた。10名が80～100%の感覚で楽しめたと回答し、４名が50%程度の楽しみ方だった。「もう１回読み直してみたら理解が深まり楽しめた」とのコメントもあり、試験のための復習効果もあったようだ。「予習と授業で２回読んだので100%理解できた」と述べる学生がいる一方、「部分的でよいから、難しい場面では日本語訳があった方が良かった」という内容のコメントもあった。読書体験として、まあまあ楽しんだ学生を含めると、原作の面白さゆえだろうが、ほぼ全員が英語での読書を楽しんだ。

リトールド版ではあっても一作品を読み終えたことに関しては、「英語で書かれた作品を（一冊すべて）読むのは初めてだったのですが、読み終わった時に理解できていたのが実感できました」、「授業を通して、有名な文学作品を内容まで詳しく知ることができてとてもよかったです」などの感想もあり、リトールド版をテキストとして用いた目的はほぼ達成できたと思われる。また、時間の許す限り行った音読については特に感想を求めなかったにもかかわらず、「声に出して読むことで、気持ちを込めて読む楽しさを実感できました」との感想があった。音読が読書の楽しさとつながるような指導を今後考えていきたい。

６．公開講座

図書館に整備した多読用図書を利用しての公開講座を実施した。参加者募集のパンフレットのタイトルは「英語で読書：絵本の読み聞かせに挑戦」、内容は「英語の絵本や物語を音読し、英語の音に慣れましょう。簡単な英語で書かれているストーリーから始めて、最後は絵本の読み聞かせに挑戦。楽しみながら英語の基礎力アップを目指します」と説明し

た。主たる教材は多読用図書のORTシリーズとEric Carleの絵本を用いた。

日程は、８月第１週の月曜日から金曜日までの５日間で、毎日10時から12時10分まで、60分のサイクルで２回実施した。参加対象者は中学１・２年生としたが、この日程が部活動などと重なったり（参加を取りやめた中学生の理由から）、タイトルや説明が難しく響いて（参加中学生の友人が挙げた理由）、中学生の参加申し込みは３名だった。そこで、問い合わせをしてくれた成人も受け入れることにした。開講日近くになっての参加取りやめもあり、実際の参加者は中学生１名、成人２名だった。

１時間ごとの内容は、①ウォームアップのためのTongue Twister他（10分）：'Peter Piper'、'Sally Sells Seashells by the Seashore'、'Humpty Dumpty'、'This is the House that Jack built'。１日１タイトルを基本に繰り返し、口をしっかり動かす、②ORTシリーズの音読（20分）：レベル２（YL0.2）からスタート。基本は、講師が読み、参加者がリピートする、③CD付きのエリック・カール絵本他の読み聞かせ練習（20分）：*Brown Bear, Brown Bear, What do you see?*、*From Head to Toe*、*Draw Me a Star*、*A Very Hungry Caterpillar*、*The Lady With the Alligator Purse*。CDをよく聞いて読む。人に聞いてもらうことを意識して読む。以上、①から③のサイクルを１日２回繰り返し、５日目の２時間目は「英語絵本の読み聞かせ」を実践した。

ORTシリーズの音読語数は、１日目：671語（ORT２～３、12冊）、２日目：1,342語（ORT２～３、18冊）、３日目：1,406語（ORT３～４、12冊）、４日目：1,341語（ORT４、９冊）、５日目：1,421語（ORT４、９冊）だった。５日間で、6,181語（60冊）を音読した。すべての本を講師が読み、受講生も読んだので、②のセクションだけで実際には約1.2万語に触れたことになる。

県立大短大部松江キャンパス

英語の音読講座開講

中学生 絵本読み聞かせ

県立大短期大学部松江キャンパスが1日、英語の物語を音読する公開講座「英語で読書・絵本の読み聞かせに挑戦」を開講した。夏休みに合わせて企画した講座で、参加者は、英語の物語を声に出し繰り返すことで、理解を深め、発音を磨く。

同キャンパスが、中学生を中心に参加を募る公開講座として初めて企画した。英語で書かれた本を数多く音読することで、発音に慣れるとともに自然と文法を覚え、基礎的な英語力を定着させるのが狙い。

同キャンパスの小玉容子教授が指導し、簡単な英語で書かれた物語を準備。親が語りかけた物語

スサノオの剣舞を披露

船通山頂で言揚祭

スサノオノミコトが降り立ったとされる船通山の山頂に、オロチ退治の際、尾から出てきた大蛇霊剣（あめのむらくものつるぎ）をかが、少女の夢の中に出てくる「The Dream」を教材に、中学生と主婦の2人の参加者が、発音や読む速度に注意し、音読を繰り返した。

参加者のひとり、松江市立高根中学校1年の小川綾音さん(13)は「英語を音で感じることができた」とし、小玉教授は「講座の最終段階では、参加者が英語による読み聞かせに挑戦できるようにしたい」と話した。

講座は5日まで開かれ、途中参加もできる。問い合わせは、同キャンパスの小玉教授、電話0852(26)5525。

小玉容子教授（右）から英語の音読を学ぶ聴講者

を後世に伝えることを誓った。

新聞に掲載された公開講座の紹介記事
（平成23年８月２日付『山陰中央新報』）

次に、毎回書いてもらった参加者の感想をもとに、講座の様子を紹介する。

中学生は、初日１時間目から「英語の本を読んで、英語の音になれる学習をして、とてもおもしろかったです。絵本も、絵を見て話すので、読みやすいし、わかりやすいです」と、絵本の音読に興味を示し、2時間目には、「音楽と一緒に音読をして楽しかったです。(ノリノリで!!)　本を読むと、自然に英語に慣れるのでいいなあと思いました」と、音読を楽しんだ。そして２日目の２時間目には、「日に日に読めるようになりました」との感想を書いていた。３日目は、「CDを聞いて、物語の世界に入り込んでしまいました。すごくおもしろかった」、「金曜日の本番に喜んでもらえるような読み方ができるように、がんばりたいです」と、絵本の読み聞かせに対する関心を高めていった。４日目には、「Mother Gooseもだんだんできるようになりました」と書いていて、Tongue Twisterも滑らかになってきた。ORTに関しては、「同じ表現が出てくると、だんだんわかるようになって、見ていてとても楽しいです」と書いていて、音と絵を介して英語のストーリーを理解することに短期間で慣れたようだ。そして最終日には、「今日は本番なので、みんなに楽しんでもらえるようにがんばりたいです」という意気込み通りの読み

聞かせをしてくれた。

５日間を終えての感想に、「２回目くらいからがんばって練習してきた絵本の読み聞かせをしました。図書館の方にもお話を聞いていただいて、すごく良い経験になりました」とあり、読み聞かせを目的の一つとしたことは５日間の講座に緊張感を持たせたようだ。ORTの音読に関しては、「１回目からだんだん長くなってきた多読本を５日間がんばって読みました。今までにわからなかった単語も、本を読むことで簡単に覚えることができました。小さい本だけど、文法もたくさん入っていてすごく勉強になりました」と、大変前向きな総合的感想を残してくれた。

一方、成人の参加者もそれぞれの目的を持ち、受講してくれた。英語検定試験３級を目指して英語を勉強中だという成人Ａさんの感想は常に、「英語が話せてうれしい。絵も楽しい。全く読めないと思っていましたが、読めてうれしい」と、声に出して英語を読む楽しさを伝えてくれた。

英語講座などに参加して熱心に英語を勉強している成人Ｂさんも、「動きの悪い舌がよく回るようになりました。英語もリズムですね。発音リズムの大切さがよく理解できました。本日は単語を一つずつ“丁寧に”を意識しました。昨日に続き“丁寧に”を意識したのですが、長文になると語尾が曖昧になるようです。自分自身“早く話す”の拘束があるようで、“早く話す”から“ていねいに一語ずつ”を明日再びモットーとしたいです。最初に比べて、ずいぶん単語の発音がclearになったと思います」と、毎時間ごとに自分で課題を持って取り組んだ音読に、ある程度納得できたようだ。最終日の感想で、読み聞かせに関しては、「人を前にして話すのは、より“ていねい”を必要とするようで、“はっきり”“ゆっくり”を意識しました」とあり、また多読本を数多く音読したことに関しては、「本を読み重ねるうちに、一語一語を“はっきり”させる口・舌が自然に出来てきたように思います」との感想であった。

音読を中心とした多読図書利用の講座は、参加人数が少なかったことが幸いして、一人一人が満足ゆく講座として展開できたと思う。成人の場合は、英語学習歴の違いから、感想のポイントが異なっているが、共通点として、音読の有効性（楽しみ・英語発音の向上）を感じてくれたと思う。多読教材や多読の実践を大学内にとどめず、中高大連携および地域連携等の場に広める今回の試みは、今後の可能性を示してくれた。

英語絵本の読み聞かせ

７．おわりに

多読では、多量のインプットを目指し、学習者のレベルを考えて、比較的やさしい英語から徐々にレベルを上げていくというやり方を行なうため、持続的な読書習慣が必要であり、場合によっては長期にわたる読書が必要となる。酒井が「急がばまわれ」ということわざで評しているように、元来多読は効率的な英語学習法というわけではない。ただし、そうした効率面での欠点を補っても余りある、読書の楽しみを味わいつつ英語力を高められるところが多読の長所であり、魅力でもある。しかしながら、本学で多読教育を行なうには、こうした多読の特性を理解しつつも、二年間の限られた修学期間での効率性や効果を考慮せざるを得ず、筆者らが多読を行なうにあたって苦慮しているところである。本稿は、これまで継続して行なっている多読教育の効果を見きわめながらも、広く多読教育の浸透と展開を図るため、これまでとは異なった目的で多読用教材を用いた英語教育を行なう可能性を探る試みであった。

［付記］
本研究活動は、平成二十三年度科学研究費補助金による研究成果の一部である。

注

1）竹森、小玉、ラング「多読・多聴による英語力向上を目指して」、および竹森、小玉、ラング「多読教育の成果と展開―2009、2010年度の多読教育から―」を参照。

2）竹森、小玉、ラング「多読教育の成果と展開」19、22を参照。

3）竹森、小玉、ラング「多読教育の成果と展開」22、２を参照。2009年度後期、2010年度前期に実施した「多読クラブ」での平均読書語数は、それぞれ6.2万語、5.7万語であった。

4）例えばBurger, Elley and Mangubhai, Elley, Hafiz and Tudor, Janopolous, Krashen, Lai, Lee and Hsu, Mason, Tsang, Tudor and Hafiz を参照。

5）Masonによれば、半期足らずの期間の多読のみによってTOEFLのスコアが平均33ポイント伸びたという。Mason "Free Voluntary Reading and Autonomy" 参照。

6）竹森、小玉、ラング「多読教育の成果と展開」21を参照。

参考文献

Burger, Sandra. "Content-Based ESL in a Sheltered Psychology Course : Input, Output, and Outcomes." *TESL Canada Journal* 6.2 (1989) : 45-59. Print.

Elley, Warwick B., and Francis Mangubhai. "The Impact of Reading on Second Language Learning." *Reading Research Quarterly* 19 (1983) : 53-67. Print.

Elley, Warwick B. "Acquiring Literacy in a Second Language: The Effect of Book-Based Programs." *Language Learning* 41.3 (1991): 375-411. Print.

Hafiz, Fateh, and Ian Tudor. "Extensive Reading and the Development of Language Skills." *English Language Teaching Journal* 43 (1989) : 4-13. Print.

Janopoulos, Michael. "The Relationship of Pleasure Reading and Second Language Writing Proficiency." *TESOL Quarterly* 20 (1986) : 763-768. Print.

Krashen, Stephen D. *The Power of Reading.* 2nd ed. Westport, Connecticut: Libraries Unlimited, 2004. Print.

Lai, Fung-kuen. "The Effect of a Summer Reading Course on Reading and Writing Skills." *System* 21.1 (1993) : 87-100. Print.

Lee, Sy-ying, and Ying-ying Hsu. "Determining the Crucial Characteristics of Extensive Reading Programs: The Impact of Extensive Reading on EFL Writing." *The International Journal of Foreign Language Teaching* 5.1 (2009) : 12-20. Web. 28 Oct. 2011.

Mason, Beniko. "The Effect of Adding Supplementary Writing to an Extensive Reading Program." *The International Journal of Foreign Language Teaching* 1.1 (2004) : 2-16. Web. 28 Oct. 2011.

---. "Free Voluntary Reading and Autonomy in Second Language Acquisition: Improving TOEFL Scores from Reading Alone." *The International Journal of Foreign Language Teaching* 2.1 (2006) : 2-5. Web. 28 Oct. 2011.

Tsang, Wai-king. "Comparing the Effects of Reading and Writing on Writing Performance." *Applied Linguistics* 17.2 (1996) : 210-233. Print.

Tudor, Ian, and Fateh Hafiz. "Extensive Reading as a Means of Input to L2 Learning." *Journal of Research in Reading* 12.2 (1989) : 164-178. Print.

小林めぐみ、河内智子、深谷素子、佐藤明可、谷牧子（編）『多読で育む英語力プラスα』 成美堂, 2010.

酒井邦秀、神田みなみ（編著）『教室で読む英語100万語：多読授業のすすめ』 大修館書店, 2005.

高瀬敦子　『英語多読・多聴指導マニュアル』　大修館書店, 2010.

竹森徹士、小玉容子、ラング　クリス「多読・多聴による英語力向上を目指して」『島根県立大学短期大学部松江キャンパス紀要』第48号（2010）：47-52.

---. 「多読教育の成果と展開―2009、2010年度の多読教育から―」『島根県立大学短期大学部松江キャンパス紀要』第49号（2011）：17-28.